水の源

MIZU NO MINAMOTO

Winter 2017
39

ウォークルポ

上下流交流・連携を通して、「あたたかいお金」による「小さな経済」の実現を

木曽川流域みん・みんの会

特集

第11回全国水源の里シンポジウム

滋賀県米原市

第9回全国水源の里フォトコンテスト

首長リレー連載

大分県佐伯市

田中利明市長

水源の里のうまいもん

幻の青ばとかご寄せとうふ

福島県金山町

岐阜県飛騨市「飛騨古川三寺まいり」

2018年1月15日（月）開催予定

飛騨古川に200年以上も伝わる伝統行事。明治時代、若い男女が知り合うきっかけとなったことから、「縁結びが叶うおまいり」として広く知られるようになりました。円光寺、真宗寺、本光寺の3つのお寺に灯る大きな和ろうそく、町中に立ち並ぶ雪像ろうそくの素朴な灯りが町を彩り、幻想的な光景を演出します。

巻頭インタビュー　水源の里へ思いを馳せる

野菜づくりから始まる農山村との交流

フリーアナウンサー・エッセイスト　**小谷あゆみ**さん

巻頭インタビュー
水源の里へ思いを馳せる

野菜づくりから始まる農山村との交流

フリーアナウンサー・エッセイスト
小谷あゆみ さん

取材ノートを片手に全国を飛び回る毎日

――小谷さんは「ベジアナ」と呼ばれていますね。

元々は石川テレビで10年、アナウンサーをしていました。自分の番組企画で市民農園や棚田オーナーになって農業体験をしていたんです。産地へ通ううちに里山の美しさに感動し、気づいたら「農山村」が自分のテーマになっていました。フリーになって東京に出て来たのですが、なんと東京にも区民農園があるじゃないかと。それ以来、野菜をつくるアナウンサー「ベジアナ」と名乗っています。ブログの読者が名付けてくれたのがきっかけで、商標登録も取りました。ぜひコラボ商品とかつくりたいですね（笑）。

――ずっと地方をフィールドにご活躍されていますが、きっかけは？

出身は兵庫県尼崎市ですが、小学校3年生から高校生までは高知県の黒潮町で育ちました。「全国水源の里連絡協議会」にも加盟されていますね。カツオの一本釣りで有名ですが、うちの家はすごい山間部で、川に飛び込んだりして遊んでいました。だから半分は田舎モンです。だけど家の事情で兵庫県に引っ越してからは、長い間黒潮町に帰れなくて。自分が失ったふるさとを探すような思いで、農山村をテーマにしてきたのかもしれないなと、最近やっと気づきました。

――「水源の里」（過疎地や限界集落）の魅力や可能性は何だと思われますか。

私は農山村を見るとたまらなく胸がきゅんきゅんする「農山村フェチ」なんです（笑）。感動するのは、自然美よりも人間の仕事に対してです。傾斜地を耕して石垣を積み上げて、棚田や畑をつくる。生きるため、食べるために築いたものですが、石垣こそ地域の文化であり、アートです。

静岡県浜松市の旧龍山村に、「瀬尻の段々茶園」という天を仰ぐような石積みの茶園があります。そこは、いま87歳のおじいちゃんが、子どもの頃に家族だけで6年間かけて築いたと聞きました。一度も崩れたことがないと。「水源の里」にも、地域ならではの英知、人間の知恵と工夫が詰まっています。私のようなよそ者や旅人は、そうした暮らしに馴じんだ風景に魅了されずにはいられません。

水源の里集落で出会った芝原キヌ枝さんはテレビ介護百人一首の大ファン

自撮り棒にてみんなを自然な笑顔に

Profile 小谷（こたに）あゆみさん

農業の楽しさ、農と福祉、農の多様な価値や暮らしをテーマに全国を取材。野菜をつくる「ベジアナ」として、『都市と農村のフェアな関係』をめざして農業・食育などの講演活動を展開。NHK「ハートネットTV介護百人一首」司会。農林水産省食料農業農村政策審議会委員

まんのう町にて栗田隆義町長（左）と森の博士！末武弘道さんとビッグしいたけ！

――ベジアナとして野菜づくりや全国の様々な場所をブログなどで発信されていますね。

ベジアナといっても、私の興味は野菜（モノ）より産地（場）です。「野菜づくりから農村と友達になろう」という考え方です。ベランダ菜園をブログでアップしていますが、育てているのは、野菜というよりも心の安らぎや癒しなんじゃないかと。花が咲き、実がなる様子は感動しますよね。都会の人も野菜づくりを自分で体験すれば、野菜という命の成り立ちを知り、生産者や農村に思いを馳せるはずです。私がそうだったのですから。

これまでの取材や経験から日本中の農山村のよさ、おもしろさをたくさん見て来ました。こんなに素晴らしく美しく楽しいのに、都会のグルメな友人は、レストランは知っていても食べものの産地を知らない。そのギャップをどうにかしたくて。だからもっと伝えたい。もっと全国のおもしろい農村を知ってもらいたいという思いで、コラムやSNSで発信しています。

――全国を回るときに気を付けておられることはありますか。

田舎は保守的だと言われますが、考えたら当たり前ですよね。みんな生まれた時から顔見知りだったところへ、急に知らない人が来たら、びっくりするのは当然です。敵じゃないですよって笑顔で示していくしかないですよね。自分たちのやり方とは違うけど、まあまあと言い合ってお互い歩み寄る、対話が大事でしょうね。わたしの農山村旅のオススメツールは自撮り棒なんですよ。一緒に撮りましょうと言ってシャッターを連射してたら、おばあちゃん達も何やようわからんなと思いながらも、ピースしてくれて笑いが起きます。村の人だけを撮ろうとすると対面になりますが、一緒に撮ろうとすればお隣さんです。心を開きやすい位置関係が大切だと思います。

――今後されたいことはありますか？

発信の拠点をつくりたいですね。農村の生産者をゲストに招いてのメディアカフェとか。この人がこんな思いでこんな田んぼでつくったんだという話を楽しく伝えておいしくいただく番組や場所をつくりたいですね。今後も、都市と農村をつなぐひとりとして、仲間を増やしていきたいです。

上下流交流・連携を通して、「あたたかいお金」による「小さな経済」の実現を

Walk ウォーク ルポ Repo

【取材・文：竹市 直彦】

2008年9月、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉に活動を開始し、来年10周年を迎える「水源の里を守ろう　木曽川流域みん・みんの会」。全国水源の里連絡協議会が今年、10周年を迎えたことを考えると、その歴史の重みに驚くばかりだ。10年もの歳月を重ねてこられた秘訣を探るべく、名古屋市内にある事務所を訪れ、共同代表の河﨑典夫さんに話をうかがった。

インタビュー中、「木曽川流域図」の着想について話す河﨑さん。
会発足時から事務局長を務めてきたが、昨年の総会で共同代表に就任された

目的は上下流交流・連携

まずは「木曽川流域みん・みんの会」とはいったいどんな団体なのか、尋ねてみた。

「木曽川流域の上流域にある農山村と、下流域である都市とが、交流・連携を深めながら、流域での共生と循環の仕組みづくりを目指して活動しています。上流の民（みん）と下流の民（みん）の交流・連携を目指すことから、みん・みんの会と名付けました」。

「木曽川流域」は、具体的には木曽川、飛騨川、愛知用水の流域のことで、現在の会員数は約100人。うち団体は11で、会員の8割が下流域住民という。

次なる質問は、「どうして、そんなに早くから活動を始められたか？」。全国水源の里連絡協議会の発足が2007年11月、その趣旨に賛同して「みん・みんの会」が発足したのが08年9月。ものすごくスピーディーな動きだ。

「たしかに、全国水源の里連絡協議会に刺激を受け、後を追うようなかたちで発足したのは事実ですが、刺激を受けたことがスタートだったわけではなくて、“発足”というゴールに向けた最終コーナーだったように思います」と前置きして、三つの布石を紹介してくれた。

川は命のつながり

布石の一つが、岐阜県御嵩町の産業廃棄物処理施設建設問題。1996年10月30日、当時の町長・柳川喜郎さんが自宅マンションのエレベーター付近で2人組に襲われ、頭蓋骨骨折の重傷を負い、肺には穴が空いた状態で病院に搬送されるという事件が起こった。町長は事件の1年半前、廃棄物処理場建設反対を掲げて当選しており、事件発生直前には町長の自宅から盗聴器が見つかるなど、廃棄物処理場建設問題が一連のトラブルの背景にあると推測された。翌97年6月22日、処分場建設計画の賛否を問う住民投票が実施され、人口約2万人の町で投票率87.5％、産廃に「反対」が10,373票（約80％）、「賛成」が2,442票（約19％）との結果となり、処分場は建設されないことになった。

「そのときの町長のコメントは、今でも心に残っています。“木曽川は命の水。御嵩町は木曽川の水を飲んではいないが、木曽川は500万人のライフラインで、上流も下流も運命共同体”と、処理場建設問題は御嵩町だけの問題ではないとの指摘が印象的でした」。

二つ目の布石は、河﨑さん自身の活動。95年に名古屋市内から岐阜県可児市に移住した河﨑さんは、2000年4月から「可児市めだかの楽（がっ）校（こう）」を主宰。会員は小学生から大人まで約20人で、毎月第2土曜日の午前10時から可児川（木曽川の支流）で水質調査や水生生物観察を行っている。また、地元の小学校2校で、環境学習の授業を担当。近くの川で年に数回、水質調査や水生生物観察を実施している。

「身近に川と親しみ、川に多くの生き物がいることを五感で知ってもらう。ふるさとの川を感じてもらう。川は上流・下流とつながっている。私たちが日々使っている、飲んでいる木曽川の水の恩恵を知ってもらいたいとの思いで続けています」。

三つ目の布石が「全国源流の郷協議会」。全国源流の郷協議会は、河川の源流域に位置する自治体が、森林環境保全や源流の郷への国の特別支援対策を求めて05年1月に発足。多摩川源流の小菅村、利根川源流のみなかみ町、紀ノ川および吉野川源流の川上村など全国16の源流地域の自治体（現在は21）でスタートしたが、その一つに、木曽川源流の木祖村があった。

「それまでも“川はつながっている”との認識は常に持っていましたが、木祖村の参画を知って、“源流”を強く意識しました」と振り返る河﨑さん。そして、ある日、これらの布石が、「みん・みんの会」発足というゴールにつながる出来事が起きる。07年12月24日の朝刊を手にした河﨑さんは、ある寄稿文に目を留めた。京都府綾部市長（当時）四方八洲男さんの「手携え『水源の里』再生を」だった。

「上流の私たちは『限界集落』ではない。下流の人たちに美味しい水を提供している『水源の里』。そうした思いから、上流の自治体146市町村が、全国水源の里連絡協議会を07年11月末に立ち上げた、という内容でした。この文章に心が揺り動かされ、08年2月に綾部に出かけ、四方市長に話をうかがいました」。

「みん・みんの会」、始動

それまでの「川は命のつながり」「上下流交流・連携」といった漠然とした思いが、「水源の里」に出会ったことで、具体的なアクションへと発展していくのに、それほど時間はかからなかった。「水源の里」を知った河﨑さんは木曽川上流域の現状が気になり、08年3月から9月にかけて、事務局スタッフ数名で、木曽川、飛騨川、愛知用水の流域自治体などを回った。その結果、「上流のことを下流の人たちが知らない事例がたくさんある」と痛感。「上流の人たちを招いての集会を下流の名古屋で開いて、都市部の人たちに上流のことをもっと知ってもらおう」と思い立ち、08年9月13日、「第1回水源の里を守ろう　木曽川流域集会」を名古屋市内で開催。220人の参加者に向けて、「森は水の源、水は命の源、川は命のつながり」「上流の山間地で暮らしながら森を守り、水を支え

ている人々に感謝し、まなざしを向ける会にしよう」と呼びかけた。これを機に、木曽川流域（木曽川、飛騨川、愛知用水）の上下流交流・連携を目的とした「みん・みんの会」の活動がスタートした。

さまざまな活動があるなか、今回は代表的な活動として、①木曽川流域水源の里基金の設立②「木曽川流域図」作り③長野県木祖村および木曽町での大豆作り味噌造り④「水源の里を守ろう　木曽川流域集会」の開催、をご紹介いただいた。

①基金の設立

08年12月に「木曽川流域水源の里基金」を設立、上流地域の生産品を物販し、その売り上げの2%を基金に積み立てる仕組みを整えた。販売方法としては、安全安心の食品にこだわる「名古屋生活クラブ」や、尾張、東三河、遠州、岐阜地域の生協が展開する「アイチョイス」など、会員制の個人宅配に協力してもらい、味噌、甘酒、漬物、ミネラルウォーター、木工製品、お酒などの上流地域の生産品をカタログに掲載してもらう。

「上流域の生産品を下流域の都市住民が購入する……物販を通した上下流交流の一つのかたちです。“この取り組みを通じて、上流域の生産者と多く出会い、知り合うことができました”といった声を聞いたり、“商品がきっかけで、みん・みんの会の活動を知り会員になった”という人がいたりして、着実な成果を見せています」と河﨑さんは評価する。成果は人々の意識の変化だけではない。売上げが年間500万円くらいあるので、毎年約10万円ずつ積み立てできるという。それに会員からのカンパが加わる。

積み立てた基金を活用して、上流の木曽町にある長野県木曽青峰高等学校インテリア科にベンチや木製玩具作りを依頼。それらの作品を名古屋市内にある東山動植物園、名古屋城天守閣、名古屋市科学館などに寄贈している。まさに上下流交流を具体的なかたちにした好例である。

名古屋市科学館を見学し、先輩たちの作品である木製玩具を手にする木曽青峰高校インテリア科３年生の生徒たち。この後、彼女たちは翌年春に科学館へ贈呈される作品作りに着手する

②「木曽川流域図」の作成

木曽川、飛騨川、愛知用水について、実際にどれだけの地域が恩恵を受けているのか示すため、源流から伊勢湾まで「川を主役とした」地図を作ろうと、1年半の制作期間をかけ12年1月に完成させた。広げてみると、中央に大きく「飛騨川流域」「木曽川流域」「受給自治体」の3エリアが色分けして図示されており、それぞれのエリア内には市町村など行政境界線よりも本川と支流が目立つよう処理されている。

「いろいろと取り組んだなかで、びっくりするくらい反響が大きかった活動でした」と、それまでの熱い眼差しから一転して目元をほころばせる河﨑さん。2,200部発行、1部800円で販売し、うち100円を基金に積み立てるという仕組み。新聞などで取り上げてもらったこともあり、各分野の人から問い合わせが相次ぎ、1,700部余りがすぐに売れたそうだ。

③大豆作り、味噌造り

木曽川上下流交流・連携の一環として「行きつけの場所」を作りたい。そんな思いが募り、11年春、木曽川源流の里、長野県木祖村に約180坪の畑を借りて、大豆、トウモロコシ、カボチャなどを栽培し始めた。大豆作りは、化学合成農薬や除草剤は使用せず、大豆の開花の時期だけ木酢液を約80倍に希釈したものを散布する。5月の大豆種まきに始まり、ほぼ毎月、何らかの活動があるので、参加者は自分の都合がつく日や、興味のある活動に、気軽に参加して交流を深めている。さらに収穫した大豆を使って味噌を製造、「みなもと」とネーミングして販売している。

長野県木祖村に借りた畑で草取り作業に汗を流す会員の皆さん（上）と、収穫した大豆で製造した、2年醸造の味噌「みなもと」（下）

④継続的な開催

08年9月13日に開催された「水源の里を守ろう　木曽川流域集会」は、その後定期的に開催を重ね、14年1月には「木曽川源流フォーラム＆第6回水源の里を守ろう　木曽川流域集会」として、「全国源流の郷協議会」と共同開催。前述のとおり、木曽川源流の里・木祖村が「全国源流の郷協議会」発足当初からの会員自治体であること、その木祖村で大豆作り・味噌造りを中心とした交流の場が整備されたことに、なにがしかの縁を感じる。

小さな経済の実現に向けて

会の発足から活動内容まで、一通りのお話をうかがって、一番印象に残ったのは「お金の流れ」だった。基金の設立ももちろんだが、それ以上に、「上流域の生産品を下流域の都市住民が購入する」「積み立てた基金を活用して上流に発注する」といったお金の循環を実現させている点に感銘を受けた。

「木祖村における大豆作り・味噌造りにしても、木曽川の上下流交流・連携の具体的な取り組みの一環であると同時に、私たちの生活・社会のあり方を問うものなんです。作る人、加工する人、消費する人

……これらの人々がつながり合ってお互いに“見える関係”が作られ、そのなかで“あたたかいお金”による“小さな経済”が木曽川流域でできることを願っています」と語る河﨑さんの強い口調に、みん・みんの会が活動を継続してこられたエネルギーの根源を垣間見た思いがした。

「木曽川源流フォーラム＆第6回水源の里を守ろう　木曽川流域集会」を、名古屋市内で開催、約150人が参加した

＊『木曽川流域図』や味噌「みなもと」の問い合わせは、メールかFAXで。
Fax 052-741-2588　E-mail：suigennosato@gmail.com

〒464-0075　名古屋市千種区内山3-7-11
水源の里を守ろう　木曽川流域みん・みんの会

特集

第11回 全国水源の里シンポジウム

オープニングで披露された「朝日豊年太鼓踊」

びわ湖の素（もと） 米原

～日本一の「びわ湖」の水源から今、見つめ直す「水源の里」の心と文化～

【取材・文：白波瀬聡美】

開会のあいさつをする平尾道雄米原市長

「水源の里」の重要性を全国にアピールし、その果たす役割について考える「全国水源の里シンポジウム」。11回目を迎える今回は、滋賀県米原市で地元住民や全国の参画市町村などから約450人の参加者を得て、盛大に開催されました。今回の特集は、2日間にわたる大会の模様をリポートします。

会場には全国から約450人が訪れた

第9回全国水源の里フォトコンテスト入賞作品の展示

合言葉は「びわ湖の素」

大会の舞台は、名峰・伊吹山から琵琶湖へ広がる美しい里山の田園風景と、私たちの命と暮らしを支える水を大切に守り続ける滋賀県米原市。琵琶湖とともに生きる市民の合言葉は「びわ湖の素」。文字通り「水源の里」としての誇りが脈々と息づくまちである。

今回のテーマは「日本一の『びわ湖』の水源から今、見つめ直す『水源の里』の心と文化」。

オープニングでは、国の無形民俗文化財に指定される米原市の伝統芸能「※朝日豊年太鼓踊」が披露され、大会はスタートした。

冒頭であいさつに立った大会実行委員長の平尾道雄・米原市長は「地方創生が叫ばれる今こそ、都会は進んでいて田舎は遅れているという地域に対する価値観を変革させなければならない。地方ならではの暮らし方や生き方に魅力を感じ、人生のスタート地点として辿り着く若者が増えてきている。この田園回帰の潮流にのって、水源の里を支える人材の裾野を広げ、新たなステージを目指していかねばならない」と説明。米原市では、Iターン者や地域おこし協力隊など、外から来た若者が地域の重要な担い手として活躍していることを紹介するとともに、上流と下流で課題を共有する水源の里の取り組みの重要性と、シンポジウムの意義について来場者らに訴えた。

※朝日豊年太鼓踊とは
伊吹山の麓、米原市朝日に約1300年前から伝わる雨乞いの踊りで、大原郷（おおはらごう）を開墾した際に始まったと伝えられ、昭和49年に国の無形民俗文化財に指定されている。

アウトドアで生きる力を磨く

開会式典に続く全国水源の里フォトコンテスト表彰式のあと、モンベルグループ代表の辰野勇さんが「アウトドア事業が地域を応援する」と題して基調講演を行った。

辰野さんは、「職業を通じた社会奉仕（Vocational Service）」という言葉でアウトドアが担うべき7つのミッションを掲げる。①自然環境への意識向上②生きる力の育成

基調講演する辰野勇さん

③健康寿命の増進④エコツーリズムによる地域経済の活性⑤災害時の対応力⑥農林水産業（1次産業）の活性⑦バリアフリー。いずれも現代社会で大きな問題となっている事象であり、それに対するひとつのソリューションとして、アウトドアが極めて有効であるということを、自身の体験を踏まえて語った。

中でも、アウトドアで「子どもたちの生きる力を磨く」という言葉は印象深い。毎年水難事故が絶えない状況にありながら、学校現場などで具体的な対応策がとられていない状況をなんとかしたいと、モンベルでは全国の子どもたちにライフジャケットをつける運動を実施している。「ただ漫然と川で遊ばせるのではなく、安全対策をきちっとした上で遊ぶことの大切さを教えなければならない」。命の危険がつきもののアウトドアに精通する辰野さんが語る、楽しみを裏打ちする備えの重要性に聞き入る。

さらに、東日本大震災支援時には、津波の危険性をわかっていながら、なんの準備もしていなかった悔しさを痛感したという。直後に開発したのが「浮クッション」。その名の通り、普段はクッションとして使い、災害時には頭から被ると浮輪のような役目を果たす。枕がついているので必ず上向きに浮き、呼吸を確保。居場所を知らせるための笛もついており、災害時の備えとして学校への設置を呼び掛ける。「震災の際、プロの潜水ダイバーが、迫りくる津波を目前にして奥さんにライフジャケットをつけながら思ったことは『（これをつけても）死ぬかもしれない、でも死んでも浮いていられる』だったと。この言葉は重かった」と語る辰野さん。浮クッションの肩の部分には紐がついている。震災後、幾人もの遺体を回収した経験の中で、よしんば命を落としても見つけて引き上げてもらえるということの有難さと重みを知ったという。

この7つのミッションを通じて地方を活性化するため、鳥取県などと包括協定を結んでいるモンベル。まちにショップができたことで地域の人が元気になり、人口が増えたという現象は「タツノミクス」とも呼ばれ、大きな話題となっている。

一冊の登山史に魅せられ、16歳から山とともに夢を追いかけてきた辰野さん。「青臭いことを言うようですが、僕は夢を持ち続けることの大切さをアウトドアから学んだ。そして夢への強い思いがつながって今がある。それは水源の里の課題解決にも通じると思います」。たった一人で立ち上げた企業は、今や山好きで知らない人はいないであろう、日本有数のアウトドア総合メーカーへと成長を遂げた。アウトドア界の風雲児が、今なお少年のような横顔で夢を語る姿に胸が熱くなる。

「浮クッション」のデモンストレーション

パネルディスカッションの様子

水源の魅力をどう伝えるか

甲賀集落では、東草野の取り組み事例の講話を聞く

基調講演の後のパネルディスカッションでは、株式会社電通の金井毅さんをコーディネーターに、切り絵作家の早川鉄兵さん、暮らシフト研究所の藤田知丈さん、いざない湖北定住センターの川村千恵さんのIターン者3人と平尾米原市長により「移住実例と今後の課題」などについて、活発な意見交換が行われた。早川さんは「今は山奥でも多くのクリエイティブな仕事ができるようになってきている。特に若手や駆け出しのアーティストに、家賃の安い水源の里での活動を勧めるようなアプローチは、今後可能性があるのではないか」。藤田さんは「衣食住だけでなく、エネルギーも地産地消できるような持続可能な地域づくりができないか。水源の里で食や暮らし方を見直すことで、大概の病気は予防や改善ができるということを伝えたい」。川村さんは「移住促進における空き家の活用には、持ち主の保守的な意識を変えていくことが必要。水回りなど最低限のハード整備に行政などの補助があれば、借り手の負担が減り、需要もふえる」。平尾市長は「情報発信などに関しては、プロや外から来た人の目やアイデアを徹底して尊重する。行政は、お金は出すが口は出さない。外から来た人が自由な発想でやれる条件を、行政や地元の人たちが『がんばれよ』と背中を押して支援する状態が人を上手く呼び込む秘訣ではないか」など、それぞれの意見を語った。コーディネーターの金井さんは「水源の里のこれからの発信はターゲッティングが重要。地域の『ありのまま』の何をコンテンツとして、どのような手段で伝えるべきか。ターゲットにきちっと響くものを作って、効果的に見せていくことが大事になってくる」と総括。課題に関する具体的な提案も出されるなど、米原の活気と底力を感じる建設的な討論会となった。

東草野の「自伐型林業」

シンポジウム翌日は市内5コースで現地視察が行われ、約160人が参加。中でも今回は、「自伐型林業」など特色ある地域づくりに取り組む東草野地域を訪れる「日本遺産　東草野山村景観コース」を視察した。

出発時はそぼ降る雨。しかし、アテンドの職員さんが開口一番「昨日のシンポジウムオープニングで雨乞いの『豊年踊』を披露したことを後悔しております」とウィットに富んだ挨拶をし、一同笑顔のスタートとなった。東草野は、姉川流域の甲津原・曲谷・甲賀・吉槻の4集落の総称で、西日本有数の豪雪地域。雪に応じた生活と峠によって育まれた文化が評価され、平成26年に国の重要文化的景観に指定された。代表的な景観は、大きく軒下を出す「カイダレ」という家の作り。昔からこの軒下を利用して、冬場も雪を避け様々な作業をしてきたという。

曲谷集落の景観を視察する

「東草野まちづくり懇話会」の座長の法雲俊邑さん（左）と藤田知丈さん

雪深い東草野の山村景観

伊吹山麓に広がるそばの白い花畑を車窓に見ながら、約40分かけ甲賀集落を目指す。そば畑が広がる伊吹山麓地域は「日本そば栽培発祥の地」といわれ、名物の「伊吹在来そば」がつくられている。到着した甲賀では、「東草野まちづくり懇話会」の取り組みについて話を聞く。東草野では、「自伐型林業」を核とした「※108次産業」の展開に力を入れている。自伐型林業とは、国土の7割を占める山林資源を活用する「地方創生の鍵」として期待され、全国各地で広がりつつある森林の管理・経営の方法。具体的には、コストのかかる重機などを使わず、少人数で作業道を確保して間伐をし、木材を搬出する小規模で持続的な林業を指す。参入障壁が低いこの形態で林業人口の裾野を広げると同時に、採算性を高めるための6次産業化を進める。さらに、個人の特性を活かした複数のローカルビジネスを組み合わせることで、地域の活性化と定住促進を目指している。

※108次産業とは
林業の復活と6次産業化
×
農業の持続と6次産業化
×
福祉・観光・サービスの3次産業の起業
を掛け合わせた造語

水源の里の担い手を育成

平成28年度からは「自伐型林業担い手育成塾」を開講。29年に市が公募した「水源の里まいばらみらいつくり隊」には育成塾出身者が応募し、3人を採用した。隊員たちは、この10月から2年半の任期で地域に入り、自伐型林業の担い手として活動を開始。今後の活躍が期待されている。様々な取り組み事例を興味深く聞いた参加者からは、「つくり隊の任期後のビジネスモデルは？」「獣害への有益な対策法は？」「地域で採れる薬草を活用した特産品開発の可能性は？」などの質疑がなされ、活発な意見交換で水源の里共通の課題を検討した。

その後の訪問地・曲谷集落では、文化的景観を視察。良質な花崗岩が産出し「石工の里」として栄えた集落内には、あちこちに石臼を用いた石垣や階段がみられ、家屋の「カイダレ」とともに、まちの風土や営みを垣間見ることができた。そういえば、出だしの雨はいつの間にか上がっている。まるで、雨乞い踊りの演出かのようなタイミングの妙に、米原に宿る神秘力を感じながら視察を終えた。

ニジマスや山菜など地元食材をふんだんに使った昼食

石臼が使用された階段

持送（もちおく）りとカイダレ

水源の里の うまいもん お取り寄せ

【文：並河杏奈】

枝豆の甘さと香りが凝縮されたなめらかな舌触り

幻の青ばとかご寄せとうふ（1つ） 2,100円（税込）

福島県金山町

面積約294㎢、人口約2,200人。会津地方の南西部、「奥会津」と呼ばれる地域に位置する。北部には新潟県に接する越後山脈、南西から北東方向に“はるかな尾瀬”を源流とする只見川、東部には沼沢火山の噴火によって出来た二重カルデラ湖の沼沢湖がある。雪解け水で育てられた豊かな甘みの「奥会津金山赤カボチャ」や、高原に自生している辛味の強い「アザキ大根」も絶品。

株式会社　玉梨とうふ茶屋
所 福島県大沼郡金山町玉梨363
Tel 0241-54-2743
HP http://aobato.jp/

今回ご紹介する「青ばとかご寄せとうふ」の「青ばと」とは、奥会津金山町の方言で枝豆を意味します。主な原料は、枝豆と水とにがり。地元会津の契約農家で有機肥料を使用して育てられた「枝豆」と、標高1,100mのブナ林から100年かけて湧き出てくる雪解けの「天然水」、天然塩田でつくられた良質な「にがり」など、いずれもこだわり抜いた厳選素材で作られています。

“この地でしかできないとうふ”を追い求めて、とうふづくりに力を注いできた（株）玉梨とうふ茶屋（本店兼工場）代表の佐々木謙一さん。「かつてこの地で食べられていた、枝豆のとうふを復活させたい！」という一心で、幼少期の記憶を辿りながら、数年かけて再現しました。

通常、重石を掛けて水分を抜くところを、「青ばとかご寄せとうふ」は一晩かけて熟成させながら、とうふの重みを利用して水分を抜いています。そうすることで、枝豆のうまみや香りをぎゅっと閉じ込めることができます。

直径約15cm、高さ約5cmもある「青ばとかご寄せとうふ」。まずはそのまま、何もかけずに味わっていただきたい。一口食べると、まろやかな舌触りのとうふから、凝縮された濃厚な枝豆の甘みと香りが口いっぱいに広がります。オーソドックスに鰹節と醤油をかけたり、軽く温めてこうじ味噌をつけたりするのもオススメですよ。

読者プレゼント

幻の青ばとかご寄せとうふ（1つ）　1名様

●**アンケート**
Q1. 面白かった・関心を持った記事
Q2. 今後取り上げてほしい内容
Q3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

●**プレゼント応募方法**
はがきもしくはメール本文にアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、P19の宛先『水の源39号』読者プレゼント係までご応募ください。
【平成30年1月31日（水）消印有効】

※当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。

首長リレー連載
No.7

私たちの地方創生

大分県佐伯市
田中　利明 市長

自然災害と自然保護について

「佐伯の殿様浦でもつ」

本市はかつて毛利2万石の城下町として栄えましたが、実質は5万石の財政力を持っていました。それは四季を通じて多様な魚が水揚げされる絶好な漁場として名高い豊後水道に面していたからです。九州と四国の間にあるこの海域で多くの魚が獲れるのは、瀬戸内海からの海流と太平洋から流れ込む黒潮がぶつかり合うことで発生するプランクトンの影響と、ミネラルを豊富に含んだ山からの水のおかげも大きいのです。そこで、古くから「佐伯の殿様浦でもつ。浦の恵みは山でもつ」と言われてきました。

今も本市の海産物は大変好評で、それに伴うふるさと納税も順調に増えております。

ユネスコエコパークに認定された大自然

今年の9月に台風18号が日本列島を縦断し、各地で猛威を振るいました。本市においても甚大な被害が生じました。家屋の倒壊や床上浸水、床下浸水など900世帯以上の被災者が生活再建に向けて立ち上がっています。また、道路や河川、農地など、一刻も早い復旧・復興を図ろうと全力で取り組んでいるところです。

今回の被災現場の中には、今年の6月14日にユネスコエコパークに認定された祖母（そぼ）・傾（かたむき）・大崩（おおくえ）山系が含まれています。この地域は、九州最高峰級の山々からなる急峻な山岳地形と美しい渓谷を有しており、イチイガシなどの照葉樹林からブナなどの夏緑樹林まで幅広く自生しています。また、ニホンカモシカやソボサンショウウオ、無斑アマゴなどの希少種も生息しており、極めて多様な「生物種の宝庫」とも言うべき、手つかずの大自然が広がっています。

特にお勧めしたいのが、県境の夏木山（1,386m）に源を発し、観音滝を起点に約8km続く「藤河内（ふじがわち）渓谷」です。

澄み切った清流が巨大な花崗岩の一枚岩を長い年月をかけて刻み、目を見張るような奇観が続きます。夏には、キャニオニング、沢登りなどで観光客にも喜んでいただいています。

しかし、残念なことに、藤河内渓谷も今回の台風被害に遭い、土砂などが堆積し、来年の夏までに復旧を図る必要があります。復旧後は、ぜひともこの素晴らしい雄大な地を訪れ、心と体をリフレッシュしてください。

台風災害に対して思うこと

近年、集中豪雨や台風の大型化など気象の変化がニュースでも話題となっていますが、今回の台風被害で目立ったのは、山から一気に流れ出た水と流木による河川の氾濫でした。これは、山の力・山の保水力が無くなっている証拠だと思います。山にしっかりとした森林があれば、その保水力により洪水が軽減できるはずです。最近、戦後の拡大造林政策によるスギ、ヒノキなどの経済林を伐採したままになっている山も多く見受けられます。今後は、針葉樹と広葉樹の混合林を活用することで、防災対策として適切な山の管理が重要となります。

私は市長として、この豊かな自然を守っていくことが使命であると感じているところです。山を守り、川を守り、海を守る。それが防災対策につながり、観光につながり、地域の活性化、市の繁栄につながるものと考え、日々全力で職務に取り組んでいます。

祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク周辺

藤河内渓谷

キャニオニングの様子

第9回 全国水源の里フォトコンテスト

水源の里の魅力を表現した作品、558点が集まる

水源の里らしい生活や文化、四季折々の表情などを収めた作品を募集する、全国水源の里フォトコンテスト。今年は撮影地を協議会に加盟する市町村以外にも広げたところ、昨年より117点多い、過去最多となる558点の応募がありました。9月末に審査会を行い、グランプリ（1点）、各大臣賞（3点）、特選（10点）を決定しました。

審査員　田沼武能（たぬまたけよし）（一般社団法人日本写真著作権協会会長）／鷲田清一（わしだきよかず）（哲学者、京都市立芸術大学学長）

グランプリ

『青春の湖』 撮影地：福島県喜多方市　**山口元広**さん（福島県三春町）

［講評・田沼］ 東北高等学校選抜ボート大会の練習風景だそうです。阿賀川のダム湖に設けられた漕艇場のデッキから、選手が湖面へボートを下ろそうとしていますが、そのボートが画面を斜めに横ぎり、素晴らしい画面構成となっています。過去のコンテストの受賞作品は伝統的な行事などが多くありましたが、この作品は近代的なスポーツの要素が加わってモダンな印象となっており、水源の里で行われたスポーツを写し出す、素晴らしい作品です。

過去の入賞作品は協議会HPに掲載しています。「全国水源の里フォトコンテスト」で検索ください。
http://www.suigennosato.com/contest.htm

特選 『とりこみ』 撮影地：高知県黒潮町
芝﨑静雄さん（愛媛県松山市）

特選 『火とぼし祭』 撮影地：群馬県南牧村
麦谷吉春さん（群馬県藤岡市）

総務大臣賞

『棚田のまつり』 撮影地：高知県大豊町　**田中安雄**さん（岡山県赤磐市）

［講評・田沼］ 極めて日本的な山村の風景ですが、このような風景もだんだんとなくなってきました。地元の人たちが祠でのお祈りの後、棚田の脇で豊作を祝い、小さな祝宴をあげています。やはりこういう素晴らしい日本の光景は、残していかなければいけません。実りの秋に神様と自然に感謝する様子が1枚の写真に写しこまれており、日本の伝統と文化を感じさせてくれます。

特選 『なかよし』 撮影地：熊本県阿蘇市
村上憲雄さん（熊本県阿蘇市）

特選 『色づく渓谷』 撮影地：京都府南丹市
井上敏和さん（京都府宮津市）

農林水産大臣賞

『田園夏景』

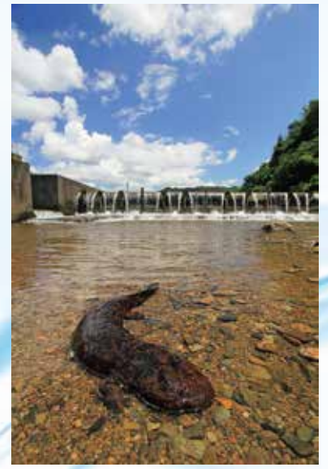
撮影地：奈良県大和郡山市

吉村　誠さん（奈良県大和高田市）

［講評・田沼］ これも極めて日本的な田園風景です。田んぼの中を毎日通う、小学生の通学姿が自然に写しこまれているのが、この作品の素晴らしいところです。撮影者は、このように田んぼが俯瞰できる場所で、どうしたらこの場所を素晴らしい作品に仕上げられるかと考えて、小学生を入れて撮られたのだと思います。最近は危ないからといってフェンスをつける田んぼもあるそうですが、のどかな風景が無くなるのは悲しいですね。日本の伝統文化を後世に伝えていくことも、写真の大事な役割です。

特選 『裏見の滝涼しいな』 撮影地：岡山県鏡野町

木浦正夫さん（岡山県真庭市）



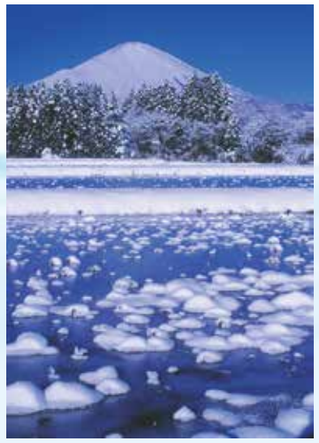
特選 『真夏の散歩』

撮影地：京都府綾部市

温井ヒロシさん（京都府綾部市）

特選 『雪模様』 撮影地：栃木県日光市

岡本宗佳さん（千葉県野田市）



特選 『降雪の朝』

撮影地：静岡県御殿場市

土屋敏彦さん（静岡県裾野市）

国土交通大臣賞

『凍てつく湖畔』 撮影地：福島県猪苗代町

浅野　良さん（福島県福島市）

［講評・田沼］ あまり見ることができない光景を撮った、貴重な写真ですね。素晴らしい光景というのは、いつ行っても撮れるわけではないので、見る人の胸を打つのだと思います。猪苗代湖から打ち上げてくる水しぶき、それが木の枝についてつららとなり、このような風景を創り出しています。その光景に、遥か彼方から太陽が当たり、氷をより造形的に美しく見せています。お星さまも写し込み、一般的にたくさんの要素を1つの写真に表現しようとするのは難しい。上手くタイミングが合って1つの作品に作り上げられた、新しい表現の写真です。

特選 『森と遊ぶ』 撮影地：京都府綾部市

白木勇治さん（京都府福知山市）

特選 『仙人修行の仲間達』 撮影地：秋田県東成瀬村

高橋信夫さん（秋田県羽後町）

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は

全国水源の里連絡協議会　水の源編集委員会

綾部市役所 定住交流部 定住・地域政策課　〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1

TEL：**0773-42-4271**　FAX：**0773-54-0096**　E-mail：**teijyutiiki@city.ayabe.lg.jp**

http://www.suigennosato.com/index.htm

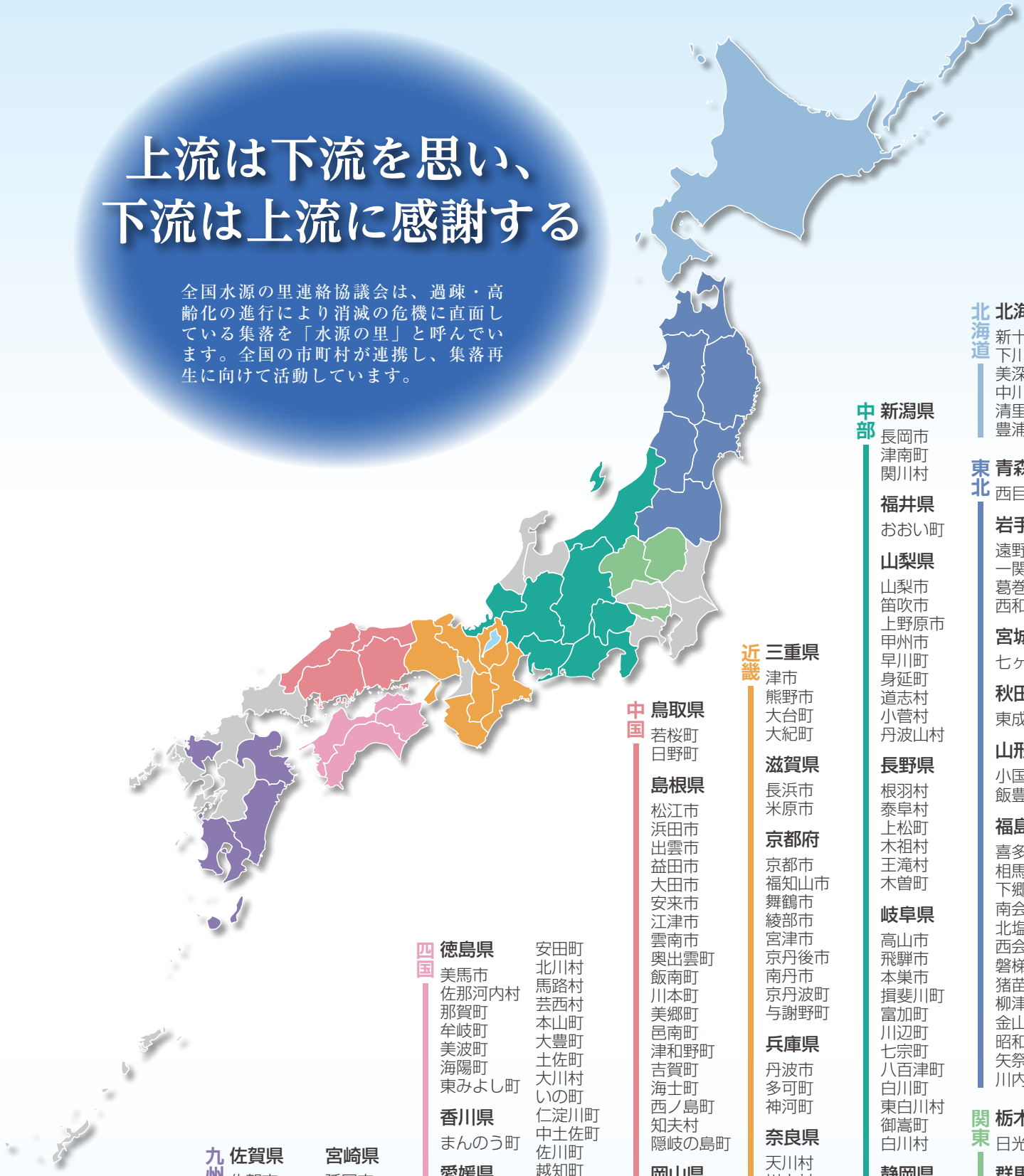
定期購読のお知らせ

『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円（送料込）

お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。



北海道

北海道
新十津川町
下川町
美深町
中川町
清里町
豊浦町

東北

青森県
西目屋村

岩手県
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

宮城県
七ヶ宿町

秋田県
東成瀬村

山形県
小国町
飯豊町

福島県
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

関東

栃木県
日光市

群馬県
上野村
南牧村
みなかみ町

東京都
檜原村
奥多摩町

中部

新潟県
長岡市
津南町
関川村

福井県
おおい町

山梨県
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

長野県
根羽村
泰阜村
上松町
木祖村
王滝村
木曽町

岐阜県
高山市
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
八百津町
白川町
東白川村
御嵩町
白川村

静岡県
小山町

愛知県
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

近畿

三重県
津市
熊野市
大台町
大紀町

滋賀県
長浜市
米原市

京都府
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

兵庫県
丹波市
多可町
神河町

奈良県
天川村
川上村

和歌山県
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

中国

鳥取県
若桜町
日野町

島根県
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町

岡山県
真庭市
里庄町
鏡野町

広島県
庄原市
神石高原町

四国

徳島県
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

香川県
まんのう町

愛媛県
西予市
久万高原町

高知県
東洋町
奈半利町
田野町
安田町
北川村
馬路村
芸西村
本山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梼原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

九州

佐賀県
佐賀市
多久市
嬉野市

大分県
大分市
佐伯市
臼杵市

宮崎県
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町

鹿児島県
日置市

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会
電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会

水の源 vol.39　企画・発行：全国水源の里連絡協議会　発行：平成29年12月　編集：水の源編集委員会